道徳と社会秩序

よい習慣をつくること

蠟山政道

ちかごろ道徳教育がやかましく議論されている。けれども、この論争は、社会秩序ないしは国家政治という広い意味の問題と関係があるために、容易に一致した意見をみることが出来ない。そこで私は「道徳と社会秩序」について考えてみたいと思う。

道徳教育とは、いったい何をいうのであろうか。概してこの問題は、戦前にあった修身教育と、混同もしくは同一視されている。そのため、従来の修身教育のごときものの復活には反対である、というのが一般に強い意見である。なるほど私どもの経験した修身教育は、例えば親に孝、君に忠、などのような、とくに教育勅語にかかげてあったような徳目、すなわち道徳的項目を直接に授業形式を通じて教えることであった。そしてそれが修身教育の特徴でもあったのである。しかるに、道徳的項目を中心とする授業が、教育的効果をもつかどうかははなはだ疑問である。一定の道徳的項目について、人々はこれを実践すべきものとして教えられても、その実践は困難である。それよりも、実際の生活行動を通して、人には親切、寛容でなければならないというような道徳そのものを教え、実行せしめる方がよい。これは徳目自体からは間接的であるかもしれないけれども、はるかに効果がある。

しかしそれだけのことであるならば、直接、間接ということの差があるだけで、それほど道徳教育という問題に大きな紛糾は生じないはずである。そこには他のもっと大きな問題があるとみなければならない。

かっての歴史教育、とくに日本史の教育にあっても、国家の起源とか、民族生活の特徴とかいうような問題に、歴史的事実として疑わしいが、神話としては認められるものを、歴史教育の中に織り込んだ。それに対して批判を許さなかった。自由な解釈は許されなかった。

これは、歴史教育としてよりも、一種の道徳教育としての理由か

ら出たもので、あきらかに政治的な動機に基づくものであった。そして国家あるいは国体のために道徳教育が利用されたので、その国家の変革に逢って、そうした道徳教育への信頼感が失われてしまった。とくに、この教育を支配していた官僚や軍部は戦争に結びついていた。そしてその戦争に負けたので、彼らの支持した道徳も歴史も、一般的に信用を失ってしまったのである。そこで道徳教育は、教育の中に再びかつてのような絶対的なものを導入するのではないだろうか。このような心配から、道徳教育は反対される。これがいろいろと意見の一致しない原因となっているのである。

しかしながら、問題の重要な点は、道徳教育の対象としての道徳の問題であって、直接、間接のいずれがよいか、という方法の問題のみではない。道徳の問題は、とかく絶対的なもの、例えばかつての天皇制や国体精神のごときものと結びつけて考えられやすい。教学刷新、あるいは国体明徴というような運動によって、批判が許されなかった。また宗教的なものと結びついて、絶対性をもつものであると思われやすいのである。そのような傾向に反対する者が多くなっている今日、道徳教育は反対をうけ、また消極的に受けとられるのである。道徳とは、いったい、絶対的なものを必要とするのだろうか。この大きな問題を解決するのにはまず、道徳とはどういうことか、を考えてみなければならない。このためには、哲学者や倫理学者の意見をきかなければならないのであるが、ここで私は常識的に考えてみたいと思う。

道徳とはよい慣習である。よい慣習——私はこのように定義づけ、解釈してみたい。世の中には悪い習慣や遅れた習慣もある。だがしかし、善悪の区別を誰が判断し、またどうして区別されるようになったのだろうか。仮に、親に孝行し、友だちに親切にすることがよい習慣であるとしよう。そうしてこれがどうしてよい習慣になったか、を追及してみる必要がある。どんな習慣でも、一つには、われわれが知識や頭脳で理解する知性の対象とすることができる。つまり倫理の尺度をあてて見ることができる。

この倫理を根源的に支えるものは宗教であろう。必ずしも宗教的信条によらなくても、科学、哲学、倫理学などの提供する知識の範囲で、よい習慣と悪い習慣を判断することはできる。そしてこれを家庭、社会で実行する必要がある。したがって、教育者として、もっと積極的に道徳教育のありかたを真剣にとりあげるべきである。教育者が道徳教育に関心が薄いから、教育の中に政治的な絶対性をもちこまれるのである。

また、家庭と学校、家庭と教師との間の遊離も問題である。家庭は学校に対して、より多くのしつけや道徳の問題を要求する。とくに現代の家庭は、しつけに専念できないことが多いので、学校に要求することが多い。人は幼いときからよい習慣をもち、それぞれの望ましい生活環境をつくる努力をしなければならない。そのためには、人間の社会生活における面を扱うところの社会科の教育のみでなく、あらゆる科目がこれに関係してくるのである。

しかし、いったい道徳教育というものは、全科でやるとか、生活を通じてやるとか、散漫なものであってよいのだろうか。よい習慣はなかなかつきにくいし、また習慣そのものの変化もある。少なくとも昔はあたりまえであったのに、今ではおかしいということがよくある。すなわち、社会秩序の変化とともに、道徳もまた変化するからである。

男女間の交際を例にとろう。男女の関係をどのようにするかは、真剣な問題としてとりくむ必要があるのに、賛成者も反対者も徹底的でない。たとえ小さなことであろうとも、無関心であったり、社会制度のもたらす短所をしらないでいることはよくない。すべての制度は長所ばかりでないのはあたり前である。何が長所で何が短所であるかを自覚して、実践の面にあらわしていくことがだいじである。プラス面をのば　マイナス面をどう防ぐかを考えなければならない。

友情の問題も　昔と現在とではたいへん変化している。人間関係の中で、男女関係は重要であるけれども、それだけではない。男と男の関係、女と女の関係もあるのである。

一昨年、私は三十年ぶりにオックスフォード大学で、エルネスト・バーカー先生にお会いした。そのとき、私が女子大学の学長であり、女子教育について尋ねたいことがあると告げたとき、先生は「それはちょうどよい。私も話したいことがある」と共鳴されたのであった。その理由は、次のようなものである。このごろ男女共学ばやりで、男も女もわけのわからぬものになっている。男らしさ、女らしさが失われてしまっている。女子だけの大学、男子だけの大学があってよい。男女共学になってから、男性的な男らしい友情、女性的な女らしい友情がなくなってしまい、学生たちは男女の交際に精力が消耗されているようだ。「美しい男の友情」「美しい女の友情」が欲しい……と。後で、他の英国人にこのことを話すと先生の齢はもうすでに八十四才であり、男女関係に対しては非常に厳密で昔気質な先生であるから、若い人たちのなかには、「そういうものは博物館にしかない」という人もあるが、私は大いに考えさせられた。

また、最近五、六十人の人と、大学共同生活について議論したことがある。そこでは、男女の交際に確信をもっている者が半分、確信をもっていない者が半分であった。

したがって今の共学制度の良し悪しについてのアンケートをとったならば、この二つの見方は、この問題の両面をあらわしていることになろう。単に制度的にきめられたとか、国がきめたとかいうように単純なことでなく、どこに欠陥があるかを知らなければならない。

われわれは、道徳とか修身ということばを嫌う。また現在の教育界は、道徳教育については積極的でない。しかし実際は、昔と同じことをやっている。今日は昔とは別の型で修身教育をやっている、とも見られないだろうか。このごろは人間性の教育、人間の形成と

いい、人間以上のものを認めない風がある。今の新しい教育では、人間を神にしている。

人間を神にするということは、いうなれば、人間性を強調し、人間の尊厳性という絶対的価値を認めていることになろう。人間性にもとづく教育は、国家中心のものから、社会中心の教育に移した。教師中心から、生徒中心の教育に変った。これも社会秩序の変化から起ってきたものといえよう。

ここで私たちは落ちついて考えてみる必要がある。過去の私たちが国家を絶対視していたように、現在の私たちもまた、気づかないうちに人間というものを絶対視しているのではなかろうか。教育は国家主義からヒューマニズムの教育に移ってきている。ヒューマニズムの教育は、道徳とどのような関係をもつのであろうか。ヒューマニズムの教育であってみれば、つねに人間性を明らかにしていく必要がある。それ故に、人間を一つのイズムとして、たとえ気づかないうちにでも、これを絶対視してはならない。

われわれは、人間に対して、人間のある立場を強調したり、それに偏向する傾向はないか。人間とは何か、ということを深くかつ批判的に見きわめていかなければならない。もし、そうでなければ、これは絶対的に、無批判的に、別のかたちで政治的になるおそれがあるであろう。現代の日本の教育界に政治的傾向が強まり、政治活動に多くの精力を費しているように見えるのは、政治を超えた根源的なところに基礎をもつヒューマニズムを、無意識のうちに政治化してしまっているのではなかろうか。ヒューマニズムは、いかなる事情があろうとも、けっして特定の政治的傾向と結びついてはならない。

今の教育は、なぜか道徳をとりあげることに反対である。それは自分が人間主義の教育を新しいものとして持っているのに自己満足をして、それがはたして道徳教育を支えていくことができるかどうかについて、省察していないためである。

人間の尊厳ということを、どのようにして教育的な課程にもちこんでいくかは、非常に困難な問題であり、幾多の努力と工夫とを必要とする。

極めて卑近のことだが、私たちの日常の挨拶をみよう。挨拶の背後には複雑なものがある。けれどもこの中には、人間の尊厳があらわれる。かっては、教師や親に対してかならず挨拶することが習慣であった。しなければ叱られる、という強制力があったためでもある。このごろはこの習慣がくずれて、挨拶するというようなことはどうでもよいように思われてきた。

このごろの学生は、先生に対して挨拶をしない。これは戦後一般化した傾向である。しかし、それだからといって、別に先生に失礼をしてもよいと考えているのではない。挨拶しないからといって、感謝の念をもっていないわけでもない。しかし、礼儀とか感謝の気持は行動の型を通じないと、やはり心から心に通じるものではない。しかし、礼儀作法などは、社会秩序といっしょに崩れつつある

と思われるのである。

これは、経済的に貧しいある漁村での話である。教師が生徒に対して、両親に挨拶するように教えたのである。生徒は正直であるから、教師にいわれたように、改まって、かしこまって挨拶した。驚いたのは父親である。「おれは人から挨拶される身分じゃねえや」といった。子どもは学校へ行って「父親に挨拶したが、そんな身分ではないといわれた。いやになった」と教師に伝えた。父親が子どもから挨拶されることがいやなはずはない。父親として挨拶されることは当然のことであり、うれしいことであるはずである。けれども、人間は理くつどおりにいくものではない。習慣というものがあるからである。人から挨拶をうけたことのないこの父親は、人力引きだった。人間が人間を引くということは、人間の尊厳に値しないばかりか、これを傷つけるものである。父親が悪いのではない。社会が悪いのである。もっと人間の尊厳に値する社会秩序をもつことが大切なことである。しかし、社会秩序は一朝一夕に、よくなせるものではない。破壊は容易であるが、建設は困難である。よい習慣をつくることにも大きな精力がはらわれるべきである。ここに教育の力がある。

もう一つ、アメリカ移民の話をしよう。子どもは学校で、アメリカの憲法を学ぶ。人間というものは、他人をなぐるようなことはしてはいけない、寛容でなくてはいけない、ということを教えられる。したがって子どもはそういう空気になれ、そしておとなになる。あるとき、その子どもが先生に、「ある外国人が私をぶちました」先生が、「その外国人は誰れだ」と尋ねた。すると、その子どもが、「私のお父さんです」と答えたというのである。親が、子どもが悪いことをしたときに打つ、ということは一つの習慣である。父親は、アメリカの習慣になかなかなじめないから、子どもからみれば、外国人である。自分の親を外国人といわなければならないことは悲しいことである。しかも、それは習慣から来る問題である。

学校教育、家庭教育、あるいは社会教育いずれにしても、教育はとじこめられた一つの世界でおこなわれるものではない。どんどん拡がっていくものである。家庭は、マスコミュニケーションとか、ムービーなどに圧迫をうけているといわれるけれども、テレビの発達のために、助かった面もある。

私の孫は、今まではよく私の家に泊ったのであるが、ちかごろは、夕方になるとしきりに帰りたがる。

「おじいちゃんの家にはテレビがないから」というのがその理由である。テレビの方が子どもをひきとめる力が強いのである。

複雑な社会に対して、家庭、学校はどうあるべきだろう。もっと真剣な問題として考えてみなければならない。そして、もっと積極的なものが欲しい。幼児の教育のうちに、よい習慣がつくように、経験者の立場からじゅうぶんに考えていただきたいものである。

結局、道徳教育とは善い習慣をつけることではないか、と思う次第である。